

# NEWS LETTER

No.16  
2017.02

## Contents

1. 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について
2. 会員の活動報告
  - 1) 「協力隊OBと留学生が先生～見える・学べる・世界の国々」ガーナを知ろう
  - 2) 日本・ブータン外交開始30周年によせて
3. 特集：大洋州における健康問題を保健医療分野の人材育成で支援する
4. 平成28年度ボランティアセミナー
5. 第4回市民公開講座
6. インドネシア留学報告
7. アフリカでのJICAボランティアの活動報告
8. 平成28年度「連絡会」定期総会報告
9. 平成28年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会活動報告



鹿児島県の離島を活用した、JICA集団コースの紹介です

## NEWS

### 会員の活動報告

- ・「協力隊OBと留学生が先生～見える・学べる・世界の国々」ガーナを知ろう
- ・日本・ブータン外交開始30周年によせて

水上 惟文

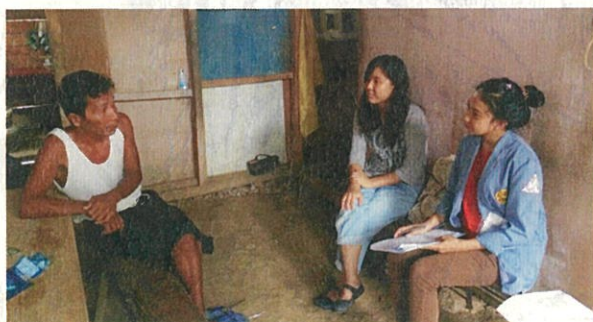
馴田 義美

### 定期総会が開催されました

2016年度定期総会が1月21日に天文館ビジョンホールで盛大に行われました。同時開催された第4回市民講座もたくさんの来場者がありました。



### 学生の国際交流



鹿児島大学医学部の田井村依里です。インドネシアのサムラトランギ大学での留学生生活を報告します。



東京大学大学院の保坂祐紀です。アフリカのウガンダでのJICAボランティア活動について報告します。

## 鹿児島県<sup>ジャイカ</sup>JICA派遣専門家連絡会について

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長  
嶽崎 俊郎  
Toshiro TAKEZAKI

JICA派遣専門家とは、開発途上国のニーズに応じた専門技術や知識を持つ専門家として、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクトに派遣され、開発途上国の最前線で活躍した人たちです。相手国技術者（カウンターパート）にさまざまな技術・知識を伝えることで相手国の技術水準の向上を図り、その国の開発に貢献してきました。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会は、鹿児島県に在住のJICA派遣専門家（OB）のネットワーク（連絡会）です。2015年12月現在、約80名の方が会員になっています。私たちJICA派遣専門家経験者は国際協力の理解者として、また、政府開発援助（ODA）の現場の体験者として、帰国後も地域におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献しています。

## 会員活動報告

### 「協力隊OBと留学生が先生～見える・学べる・世界の国々」

ガーナを知ろう

水上 惟文  
Korebumi MINAKAMI

いちき串木野市立生福小学校からの依頼で、鹿児島大学の留学生、溝口マルコスさんと共にJICA国際協力「出前講座」に行った。場所は、いちき串木野市の生福小学校で、2016年10月27日（木）10時50分～11時35分、4～6年生56人を対象に、私は海外での体験談として「ガーナを知ろう」という題名で話した。マルコスは、母国ブラジルの文化・伝統・生活様式について紹介した。

講演の目的は、児童に様々な世界に目を向け、文化や伝統について理解し、広い視野から判断し、国際感覚を身に着けさせることだそうで、活動報告ではないと言われた。そこで、以下の内容について話した。

①ガーナの概要：ガーナは金が産出するため植民地時代は黄金海岸と呼ばれていた。南北アメリカの黒人のルーツで、公用語は英語、多くの部族語が話されている。首都はアクラで、気候は熱帯

性気候で5～9月が雨期、10月～2月が乾期。通貨はセディ。②料理：フーフー、ケンケ、ガリ、ライス&シチュー、ライトスープ。③産業：カカオの世界的生産国で、日本に輸入されるカカオの70%以上がガーナ産である。ココアコーラの原料であるコーラの豆も主要な輸出品である。アフリカ近海で獲れる魚介類は日本へ輸出されている。2010年に石油が発見され産油国となった。アク



奴隷貿易の拠点、エルミナ城

ラには巨大市場、マコラ・マーケットがある。④野口英世：ガーナ大学医学部構内の胸像。野口英世が黄熱病研究を始めた背景、研究経緯、感染死亡まで。私のガーナ派遣、英世の助手、Mr.ウィリアムズとの出会い、野口記念研究所建設。⑤教育：インターナショナルスクール、日本語補習校。⑥奴隷貿易の仕組み、エルミナ城、大西洋三角貿易。⑦ガーナでの活動内容。

講演終了後、児童から様々な質問が出た。それは、現地語での挨拶、食事、生活水準、カカオとコーラの実について、野生動物、ガーナ人における野口英世の知名度、等であった。普通の講演会だと、なかなか質問は出ないが、質問が多いのには驚き、ちゃんと話を聞いてくれていたのが分かって嬉しかった。講演会終了後、6年生の児童と一緒に給食を食べて帰った。

## 日本・ブータン外交開始30周年によせて

馴田 義美  
Yoshimi NARETA

日本とブータン（以下、日ブと略）の外交関係が1986年3月28日に結ばれてちょうど30年が経過しました。それを記念して幻の蝶ブータンシボリアゲハ、仏像、仏画、法典、宗教用の楽器、繊維、衣装などの展示イベントが2016年5月から約2ヶ月間、東京で開催され、その後他の都市を巡回中です。また、日本人旅行者に限り6月から8月の3か月間だけ公定料金（季節ごとに変動しますが、三食、ガイド、運転手付の宿泊込で原則一人1日250ドルを支払うシステム）が撤廃され、国営雷龍航空（ドゥック・エアー）と民営ブータンエアラインの航空運賃半額キャンペーンも実施されました。

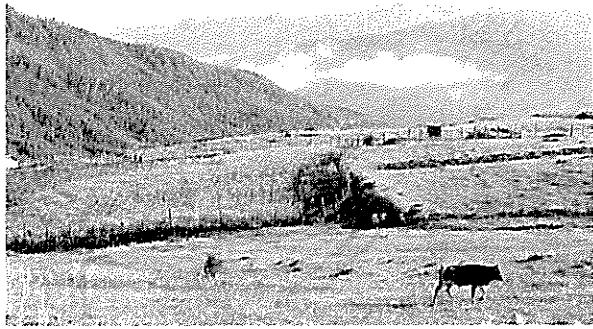
九州からブータンへ行く場合、福岡からタイのバンコク経由で、一泊してから翌日の早朝便でこの国唯一の国際空港パロへ向かいます。途中、バングラディッシュのダッカやインドのバグドグラ、グアファティなどを経由して約3時間余りのフライトです。なお、羽田からバンコク行き深夜便を利用すれば、早朝便に乗り継げます。また、ヒマラヤ山脈、特にエベレストの眺望を楽しむなら、ネパールのカトマンズから一時間弱のフライトです。

以前の投稿と重複しますが、ブータン入国には、経由地での搭乗手続き時に、労働許可証の提示、招待ビザまたは観光ビザの写しが必要です。たとえ航空便の空席があっても予約済みでも、それ

だけでは搭乗できませんので注意が必要です。また、到着時に労働許可証を持つ人以外は、ビザ料金40米ドル相当額を入国手続き時に支払わなければなりません。さらに、国内移動には、訪問予定の県名が記載されたルートパーミット（通行許可書）が必要です。このルートパーミットは、入国後首都ティムプーのノルジンラム（ラムは、通りの意）をほぼ登り終えた左手の移民局で申請します。従って、入国したらまず首都に向かいこの手続きを最優先にやります。

さて私は、日ブ間の職業訓練プロジェクト（正式には、「ブータン国職業訓練校の質的強化プロジェクト」）に、調査団、短期、長期派遣と3回関わってきました。ニュースレターNo.8（2009年2月発行）には、「ブータンの暮らしを垣間見る」の副題で2008年12月の調査団報告を、長期専門家として赴任中にニュースレター第12号（2013年2月発行）に「ブータンの国情と人々」を投稿しました。以下、日ブ協力の後半、2011年5月から2013年5月までの2年間に現地で見聞きしたことを中心に、今回も専門の電気電子、制御関係に関することは省略して、先の投稿の若干の補足をします。

最初は、宗教、民族と教育事情です。信教の自由は憲法で保障されていますので仏教、ヒンズー教、キリスト教の三つが主なものです。仏教が



斜面に広がるソバ畑、中部トンサ付近（9月）

「国教」だとする記述を様々なメディアで見かけますが、厳密には間違いです。ただし、推定でほぼ85%以上が仏教徒で、かつカギユ派から分かれたドゥック派（国名のドゥック・ユルは、これに由来）を国が保護していますので国教と書かれてもやむを得ない面もあります。ブータン人は、ドゥックパ、シャーチョッパなどと呼びますのでそれぞれの出身地がわかります。民族的には、多い順にチベット系、ネパール系、インド系、少数山岳民族が北部のラヤツパ、東部のタシガン県メラ、サクテンに住むブロッツパ、南部の低地に住むドヤツパなどです。なお、パは、現地の言葉ゾンカ（カは「語」の意）で「人」を意味します。

仏教は、完全に人々の生活の一部になっています。例えば、カレンダーには、ゾンカ文字の数字が書かれていますが、それを見て彼らは即座にこの日とこの日は、肉なしの日（毎月1、2回）だとか、宗教行事（ツェチュと呼ばれる重要なお祭り、後述するお寺のゾンで数日間開催され、各県ごとに開催月が異なります。ツェチュの本来の意は「月の10日」）がある日を言い当てます。また、生き物はたとえ害虫であっても決して殺さずに追い払います。ソファの下に木材がシロアリに喰われ、アパートの大家さんと一緒に補修していた時、這い出てきたシロアリをつぶそうとした私に、「あなたは、仏教徒だろう」と窘められました。また、別の日には、窓からはいつかクマ蜂を一生懸命外に追い払おうとする人々も目撃しました。これらは、彼らの死生観の現れです。つまり、死後50日までは、魂は自分たちの周囲にあり、それが過ぎると魂は、あの世に行って誰もが「転生」すると信じているのです。日本の仏教では死後49日を忌明けとしますが、ブータンでは翌日

から起算して50日です。ただ魂があのお世に行った後、いつ、どこで、何に「生まれ変わる」かは、誰にもわかりません。それゆえ誰かの「転生」した姿である動植物は、大切にされます。犬、牛、馬、羊などは、道路や野菜市場（サブジバザール）のどこでも放し飼いで、それらの動物が道路を歩いていれば車の方が避けて通ります。

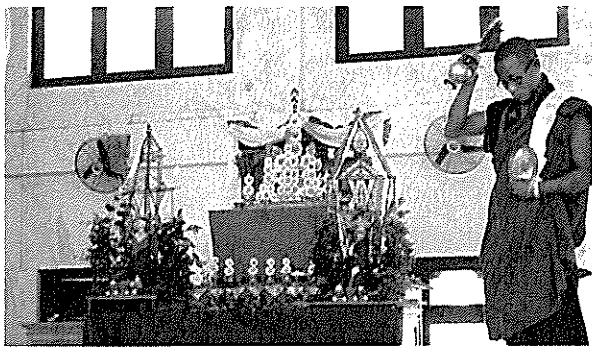
赴任中に、仏陀の遺骨の一部とされている「宝物」がブータン中を巡回したことがありました。人々は正装して、お布施（日本円で10円から40円程度）を手に、それを拝観するために長い行列を延々と作っていました。後に触れます宗教界のトップ、ジュ・ケンポが冬に避寒のためプナカに移動する際にも、道中の村人に対しプジャ（清め）をします。一般に、プジャと呼ばれる儀式は、建物の完成、病氣、葬式、お祝いごとなど日常生活のあらゆる場面で行われています。

お寺は、ゾン、ラカン、ゴエンパの三通りの呼ばれ方をします。まずゾンは、各県に必ず一つはあり僧院内に役所があります。公式にゾンに入る場合は、男性は「ゴ」を着用し左肩からカムニを、女性は「キラ」に同じく左肩にラチュをかけます。外国人は、男性の場合ネクタイ着用が基本です。首都ティムプーのタシチョゾンには、国王が執務する部屋があります。国王執務中は、旅行者など部外者の立ち入りは禁止されます。また、タシチョゾンに入る時は、空港並みのセキュリティチェックを受けます。

寺の内部に祀られる仏像は、釈迦如来だけでなく、チベット仏教の開祖パドマサンババ（別名グル・リンポチェ）、建国の父ンガワン・ナムゲル（別名シャプドゥン）など多種多様です。プナカゾンには、釈迦如来を真ん中にして左右にこれらの仏像があります。

仏像は、例外なく撮影禁止ですが周囲の外壁などに描かれる宇宙図や六道輪廻図（シポコロ）、男女の合体を描いた歡喜仏（ヤブユム）、曼荼羅などがあればそれらは撮影できます。

一方、ラカンと呼ばれるものは、人々が毎日お参りできるようにたいがい人家のある場所にあります。それに比べて、ゴエンパ（「山頂」の意）



訓練校の体育館でのプジャ（清めの儀式）

は、やや人里離れた修行の寺といった感じです。お寺には、修行僧や少年僧が住み込んでいて、先生である僧侶から、ゾンカで書かれた経典などを習います。さらに一部のラカンには、身寄りのない人が生活していますのでお寺は、一種の福祉施設の役割も担っています。

仏教界には、大僧正ジュ・ケンポがいて、国営テレビBBSのチャンネル1を通して毎朝ゾンカで祈りと説教を行ないます。彼は、国王と同格とされ今も絶大な尊敬を集めています。プナカゾンで現国王の結婚式を取り仕切ったのもジュ・ケンポです。冬になる季節、ジュ・ケンポ一行は、首都のタシチョゾンから2日から3日かけて温暖なプナカゾンに移動してきます。人々は、彼のプジャを受けるため道中、道端に列を作って到着を待ちます。2008年7月の憲法発布以降、正式に立憲君主国がスタートしましたが、政治と宗教が分離されていなかった頃の影響は、今も色濃く残っています。

お寺での参拝の仕方は、まずお布施を額に押し付けて差し出した後、両手を高く上げてから胸の前で祈りの姿勢を取って膝を折り、両手を前に出しながら床に置き、頭を床につくまで下げます。そして再度立ち上がり、これを後2回繰り返します。いわゆる五体投地の方法ですが、膝を折った際に体全体を前に投げ出してから立ち上がる人もいますので、そちらが正式かと思われま。また、ある程度の金額以上のお布施をすると、寄付者の名前を書いてゾンカの領収書が渡されます。ギャンティ・ゴエンパでは、別室に案内されてザウ（米粒あられ）をふるまわれ、バター茶の接待を受けました。そして僧侶が今日は、あなたの名前を入れて祈りますと言われました。もっとも、個人

的な願いを祈ることは、この国では皆無で、世界平和や隣人皆の幸せを願うのがブータン式です。

ブータン国内の学校教育は、義務教育ではありません。就学年齢の下限が決まっているだけで一般的な学齢期を過ぎていても入学できません。就学前の幼稚園に相当するクラスもあります。小学校での教育は、低学年はゾンカのみ、3年生くらいから国語のゾンカと歴史を除き、科目は全て英語で行われます。これは、本来が宗教用語中心のゾンカには、上級学校で習う物理などの専門的な用語の語彙がないからです。普段でも英語で会話する若い人も多くいますが、おおむね55歳以上の人々は、英語教育開始前の世代のためゾンカしか話せない人が一般的です。面白いのは、英語にゾンカの言い回しがはいつてしまっていることで、丁寧な言葉で「そうですよね」という意味の「ラ」とか、「そうです」と肯定する「インラ」が、会話の末尾につきます。小中学校や訓練校の教科書は、使い回しされ個人の所有物ではありません。そして、公立学校の教育費は、一部の雑費を除き小学校から大学まで、また国内に8つある職業訓練校も医療費と同様に無償です。訓練校の生徒は、少額ですが給付金も支給されます。2013年2月現在、ブータン南部サルパン県にインドの援助による大規模な職業訓練センターを建設中でしたので予定通り進捗していれば、職業訓練校は人員配置も含めて再編されているかも知れません。

二番目は、政治です。2008年3月、国民が初の選挙を経験して5年が経ち、2013年4月に上院選挙、その後の5月と7月に下院選挙（2回投票制）が行われました。上院は勢力拮抗したものの下院では、与野党の勢力が逆転し政権交代が起きました。首相は、7月ティンレイからTshering Tobgay（ツェリン・トゥブゲイ、米ハーバード大卒）に交代しました。政治家転身前は、労働人材省局長の任にあり、日ブ間の初めての職業訓練プロジェクトを立案し実現に尽力したプロジェクト生みの親でもあります。最初の2008年下院選挙では、わずか2人だけの議員の野党党首でしたが、2013年の改選時に彼の率いる国民民主党は、下院47議席中の32議席を獲得

し、ティンレイ率いるブータン調和党を破りました。

この現首相については、ちょっとした思い出があります。2008年12月、最終計画策定調査が終わる数日前、ちょうどブータンの建国記念日（12月17日）のことです。プロジェクトの行方が気になった彼は、式典の途中、競技場内にいた私たちのいる席に来て帰国する前日夜にレストランで夕食を一緒にしないかと非公式な招待をしてくれました。当日指定された店でメニューにはないソバを食べさせてくれました。ブータンのソバは「プタ」といい、製法は全く日本と同じですがシーソーの原理で動く手作りの製造器具を使い、人のお尻の力で器具中央からトコロテン風に突き出す方法で作ります。ソバ料理は、ゆでるところまでは日本と同じですが、味付けが卵と野菜を混ぜて油で揚げたものです。

首相就任後のツェリン氏は、2014年6月下旬に数日間来日、政府首脳と会談していますが現5代国王が来日した2011年11月当時のようなブームはすでになく、ほとんど注目を浴びませんでした。NHK教育テレビの「スーパープレゼンテーション」という番組で、アメリカの聴衆を前に、地球温暖化の問題を熱く語っていたのを見ることがあります。ブータン最西端八県の出身で、実直で気さくな人柄が印象に残っています。

三番目は、鹿児島ゆかりの方とブータンとの関わり及び王室、そしてダショー西岡です。2012年8月NHK総合テレビ「鶴瓶の家族に乾杯」でパロが、放送の舞台となったことをご存じでしょうか。その空港から左に車を走らせ、市街地を抜けて20分ほど走った左の山裾にキチュ・ラカンがあります。ここは、13世紀には建立されてい



タロゾンでのツェチュ（3月）

たそうですが、はっきりした記録は残っておらず中部ブムタンのジャンペ・ラカンと並びブータン最古の寺といわれています。そのキチュ・ラカンの裏手を登ると、そこに日ブ関係の嚆矢となった元コルカタ領事であった東郷文彦氏のチオルテン（仏塔）があります。外交関係のなかった当時文彦氏は、在職中に私財でブータンに援助を行ない1985年4月に70歳で没しています。この仏塔に、いせ夫人と子息の茂彦氏が1987年9月、故人の分骨をしました。なお、転生を信じるブータンでは、個人のお墓はありませんので仏塔は、慰霊碑か記念碑に近いものです。

東郷文彦氏は、コルカタの領事館やブータンで、3代国王に連れられたまだ幼い後の先代国王をかわいがりしました。従って文彦氏は、今も健在の3代国王の王妃（先代4代国王の母）だったアジ・ケサン皇太后とも親しかったのです。そうした経緯もあって、この東郷チオルテンは、現在もパロに住む皇太后が、文彦氏を偲び建立したものです。チオルテンが建立されている日本人は、今もブータン農業の父と崇められる西岡京治（1933年～1992年）氏と東郷文彦（1915年～1985年）氏だけです。鹿児島とのつながりですが、先の大戦の開戦時と終戦時の外務大臣であった東郷茂徳氏は、文彦氏の夫人いせの父でした。出身は、日置市東市来の陶器の里、美山です。東京都出身の旧姓本城文彦氏は、一人娘いせの婿養子となり、東郷姓になりました。美山には、東郷茂徳氏の功績が展示された東郷記念館があります。ブータンとの関わりも是非追加してほしいと願っています。

また指宿ベイテラスホテルには、ホテル内の喫茶店の一部に、キラ、上着のテュゴなどの民族衣装や民具などが展示されています。ここが鹿児島でブータンの雰囲気味わえる唯一の場所です。これらの収集品は、新日本科学会長・社長の永田良一氏によるものだと思われます。永田良一氏は、一時私費でブータンからの学生を呼び鹿児島大学農学部に留学させていました。

さて、昭和天皇の大喪の礼（1989年2月24日）の前日、当時32歳の先代4代国王は、その4年前に没した文彦氏の東郷家を弔問しました。他の途上国代表が日本に援助を求める弔問外交を

展開する中、先代国王はそうした行為には一切無頓着のまま大喪の礼をすませるとすぐに帰国しました。有名になったGNH（国民総幸福量）の概念を1976年に21歳の時に提唱した人でもあります。彼は、英国でエリート教育を受けていますが、1972年7月、ナイロビで客死した父3代国王の後継者としてわずか16歳で王位を継承、2006年12月に50歳で自ら退位表明するまで34年親政を行ないました。なお、大喪の礼では、西岡京治氏も一時帰国して4代国王に付き添っています。

先代4代国王は、ブータン南部の密林に越境して来た反インド勢力が、再三警告を発したにも関わらず退去しなかったため、2003年12月、自ら先頭に立って軍を率いて掃討作戦を指揮しゲリラを追い払い短期間に解決しました。この功績は、国民の大きな共感を得て、退位後の今も絶大な人気を誇っています。この掃討作戦の後、犠牲になったブータン兵士たちの霊を慰めるため首都から東に向かう道の峠、ドチュラ（ラは峠）に108のチョルテンが建立されました。また、民政移行前に国会決議により退位させることができる国王退位条項を自ら発案し国会に提案しました。

先代4代国王は、現国王が2006年に即位しその2年後の11月に即位式典が行われた以降も首都のチャンリミタン競技場などで行われる建国記念日などの諸行事に堂々と姿を見せます。私も、2008年の建国記念日に、チャンリミタン競技場で、また2011年結婚式披露宴の時にプナカゾン隣接の王宮広場で、招待客に挨拶する先代国王を、真近で見えています。若いながら眼光が鋭く、かなりの威厳を感じました。日本からの表敬客が、現国王に謁見する際には先代とも会談するそうです。国際情勢に明るい彼は、滔々と情勢を語り対面した相手が驚くそうです。昨年2016年6



プナカゾンのジャカラダ（4月）

月まで外務事務次官を務めた齋木昭隆氏（元北朝鮮関係六ヶ国協議代表）は、2011年からの1年半ほどのインド兼ブータン大使在任中5回ブータン入りし、旧現国王の二人と会談しました。2011年6月下旬、クルタンでの大使主催懇親会（周辺在住の在留邦人11人が参加）で会談の模様を、聞く機会がありました。当時の齋木大使は、隣県のウォンディでの架橋落成式の後、職業訓練プロジェクトの現場であるクルタンの職業訓練校KIEE（クルタン電気技術学校）も視察しました。その半年後、和服姿の尚子夫人（現在、外務省国際法局長）を伴い再び来ブ、2011年11月13日、現国王結婚式に数少ない日本人招待客として早朝からプナカゾン内で国王の結婚式を見守りました。国民との対話を重んじる国王は、午後からは、近隣から集まった住民や学校生徒の祝いの踊りが続く結婚式披露宴の最中、プナカ王宮特設広場に集まった人々に声をかけてまわりました。人々は、行列を作って王様と会います。並んだ私にも、話しかけてもらい国王自ら手を差し伸べてこられたので握手を交わしました。

その後、結婚を記念した特別な100ニユルタム札、国王と王妃の顔写真入りの切手などが発行され、当時は品切れになるほどの人気で観光客がプレミアム付きで買い求めるほどでした。

前後しますが、その1年前、短専派遣中の2010年8月、後に日銀総裁となる黒田東彦（はるひこ）氏が、当時アジア開発銀行（ADB）総裁として本拠のあるマニラからブータンに夫人等5人で、視察に来ブ、その時に私は当時6ヶ月短専で来ていたM専門家とともにKIEEの実習場を案内しました。この施設は、創設当初ADBの援助で建設、機材供与をしてもらっていたのです。その他、2013年2月に、土曜日だけ開かれるクルタンの野菜市場で、俳優の堺雅人と結婚する直前の女優Kさんに遭遇したこともありました。日本のマスコミによって作られた「幸せの国」のイメージの強いこの国に魅せられる著名人は多いようです。

自らの意思で退位したジグメ・シンゲ・ワンチュク先代4代国王と継承したジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク現5代国王との関係は、現在の

日本でにわかには浮上した現天皇の退位後の地位と活動の在り方を考える際に、ブータンの例が参考になるのではないかと考えます。もっとも、厳格に決まりごとを作りたがる日本、決まりごとをほとんど作らないブータンという違いはありますが、退位後の活動についてはあまり細かいことにこだわらずに臨機応変に対処するこの国の先例に少しは学んでもいいのではないのでしょうか。

さて、日ブ関係を語るために欠かせない西岡京治（けいじ）氏のことをもう少し詳しく紹介します。西岡氏は、東京オリンピック開催の年1964年にブータン入りし1992年に敗血症で急死するまで約28年間、農業専門家として現在は農業機械化センター（AMC）となったパロのボンデ地区を拠点としてコシヒカリを代表とするジャポニカ米（現地のパロ米は、日本米の別名）の導入普及、リングヤアスパラガスなど換金作物用果樹、レタスや大根等の野菜栽培、品種改良を農民に教えました。

途中、当時19歳の先代4代国王の強い要請を受け、1976年から約3年半余り、焼畑農業しかなかった中南部シェムガン県で、ボンデの現地スタッフ10名を連れて赴き、コメ作り等を指導、水田耕作面積を以前の約50倍、60haまで飛躍的に拡大させました。それだけでなく、現地の技術を生かした方法で水路、学校、診療所や数多くの吊り橋なども指導して住民とともに汗を流しました。こうしてシェムガンは、最貧県から有数の穀倉地帯に生まれ変わりました。これらの功績により1980年、外国人初となるダショー（爵位、最高の人意）を先代4代国王から授けられました。また、無償資金協力を活用して農業機械の導入にも尽力し、種苗センターとあわせ両施設の基盤を作りました。2013年、AMC内に西岡氏を祈念する部屋がJICAボランティアの協力で作られました。部屋には、ゴを着用し赤いカムニを左肩からかけたブータン式正装に、授与された刀剣を持ち、皮の伝統靴ラムを履いた西岡氏の写真が飾られています。この国の政府高官に初めて会う日本人は、おそらく私がそうだったように「ダショー西岡」のことを聞くことになるでしょう。1992年3月21日に没し、家族の到着を待って5日後

にAMCを見下ろす丘で荼毘に付されました。後に、その丘に西岡チョルテンが建立され、すぐそばには番小屋まであります。2010年には、在留日本人の寄付によって彼の功績を記した日本語案内板が建てられました。当時、国葬にされた葬儀には、約5000人が参列したと伝えられています。なお、この国葬の様相を撮影したフィルム映像が確かに日本にあるらしいのですが、様々な理由でこれまで公開されたことは一度もないと聞きます。また、西岡京治氏のブータン入国50年に当たる2014年に放送予定でNHKが彼のドラマ化を企画しました。2013年春、王室の許可を得て王様役のブータン人の配役も決まり、時代考証など準備が進んでいたものの途中で、ある事情により頓挫したままです。彼の功績が広く日本国内に知られるまたとない機会だっただけに残念でなりません。

四番目は、ブータンの自然保護及びチベットとの国境問題、景観です。森林保護は、法律上、国土の森林割合が60%を下回らないこととされていますので、木の伐採は基本的に許可制です。どこの山かは忘れてしまいましたが、外国の調査で金が採れる山があるのがわかっているようですが、その近くにはお寺があり開発はされてないと聞きました。もっとも開発して経済的に豊かになろうという発想は、この国にはありません。一般的に、山は神聖な場所で人は住んではいけないとされています。その副作用として、北西部のチベットとの国境山岳地帯の一部の領土を中国政府によって切り取られてしまいました。そのためブータンの面積は、九州の面積の0.9倍になってしまいました。正式な国境策定交渉は今も続いています。実質上一帯の山々に自国民を居住させ



東ブータンに生息のゴールデン・ラングール



て既成事実を作ってしまった中国の干渉はこれからも続くことが予想されます。

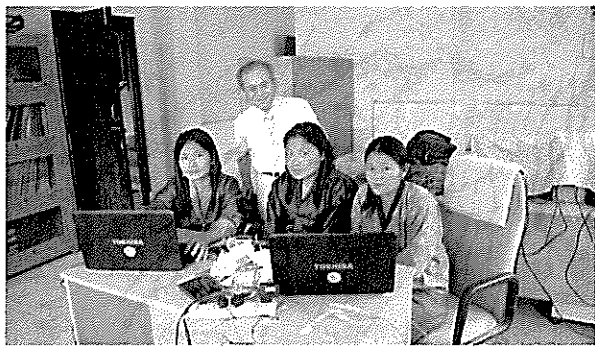
ブータンの景観は、どこを走っても山また山の連続で、まず日本では考えられないような3000mくらいの高山をくねくねと生活道路が走っていますので、山道の下を雲が走るのを見るのは珍しくありません。先に触れたドチュラですが、首都からは、平均時速30Kmで急坂を登ること約45分、標高約3100mの場所にあります。ドチュラからプナカまでは、下り道だけの1時間弱の行程です。ドチュラからは、10月から4月の乾季になると、澄み切った青空の向こうに冠雪した北ヒマラヤ連峰が視界130度くらいの範囲で見渡せます。私は、この曲がりくねった山道をプロジェクトのピックアップトラックで、プナカとティムプー間を何度も運転して往復しましたので、道のどこを走っていてもあと何分でロベサだとかの地名を感覚的に覚えてしまいました。ただ、この道路は、ガードレールはなく運転をちょっとでも間違えると、まさかさまに谷に落ちる道ばかりですので、緊張の連続でした。ドチュラに限らず標高の高い峠、例えばポブジカの先、トンサへ向かう途中のペレラ（約3300m）付近でも、春3月中旬ころから自生のシャクナゲ（一説には国内に200種）が、大木の枝に咲き一帯が赤、ピンクや白色などの花いっぱい風景に変化します。また、クルタンの町の先、車で10分ほどのところにあるプナカゾンでは、4月中旬頃から前を流れるモチュ（チュは川の意で、「母川」）に沿って植えられたジャカラングの並木がうすい紫色の花に染まります。右手のポチュ（「父川」）と合流したプナサンチュからゾンを見上げると、後方に雪をかぶった峰が山の合間に見えます。

冬近く11月には、ヒマラヤの7000m級の高峰を越えてチベットからオグロ鶴がブータン中部の村ポブジカに飛来してきます。約4か月間、翌年3月くらいまでそこで越冬し、チベットに戻る時には、ニンマ派の古刹ギャンティ・ゴエンパの上を3回まわっていくとか。ここには、短寿の夏1回、赴任中夏2回、冬1回訪れましたが、ペレラへ向かう途中の道を右へ上り、小さなチョルテンから左に降りる途中の山には、熊笹があり北海道を、降り終えたなだらかな平原は尾瀬ヶ原を思わ

せるブータンらしからぬ風景が広がっています。プナカからは、車で片道約3時間弱行程（首都からはさらに1時間半余りをプラス）です。ポブジカ村は、飛来してくる鶴が電線にひっかかるのを心配した村人が、電気のない生活を選んだことで有名になりました。A3サイズほどの小さな太陽光パネル一つだけ屋根に載せた家が並んでいましたが、今はドイツの協力で鶴越冬地一帯が地中電線化されました。鶴観察センターもあり、中の展示には、日本の鶴の写真もあります。ブータン人も日本人と同じく長生きの象徴の鶴が大好きです。鹿児島の出水にシベリアから飛来する鶴の数には及びませんが、それでも年間300羽前後は飛来します。また、運が良ければポブジカ周辺に生息するシカやサルに遭遇します。さらに、東部モンガルからタシガンにかけての一帯には、金髪の猿ゴールデン・ラングールが生息しています。ブータン東端のタシガン県ランジュン校からの出張指導の帰途、このサルの親子に偶然出会いました。この猿は、出会った人に幸せをもたらすといわれています。

プナカから北へ登っていくとガサ県です。ここには、道路の途中から右折して車を駐車してから、30分弱歩いて下る場所の河原に、屋根付きの混浴の温泉があります。ブータン女性は、一般におおっぴらなので、浴槽では目の置きどころに困ります。また、近くの山一帯では、国獣に指定されている野生のターキンが出没します。私は、首都にいる動物園のおとなしい姿しか知りませんでした。さすが野生のターキン、車の目の前に現れたと思った瞬間すばやく谷に走り去りました。世界三大珍獣ともいわれるこの動物は、豚の爪のような足を持っていますが四足で立った高さが成獣で1.3mくらいと大きくはありません。このほか、ヤクもパロのチェレラ（約3800m）へ向かう道やペレラ付近で、見かけました。ヤクの干し肉は、食用ですので放牧のヤクは、結構ひんぱんに見られます。ただ、噛むのには時間がかかるとも硬い肉質です。

次第に現代化の波が押し寄せてきたこの国では、プリペイド式の携帯電話がかなり普及しています。平均1車線半の狭い道を行き交う車も、私



指導員研修を指導する筆者

が最初に来た2008年の頃に比べれば、かなり多くなりました。首都ティムプーは、ブータンの総人口約75万人のうち、ほぼ13%の10万人弱をかかえていて、なお拡大しています。パロに向かう道の郊外にどんどん家が広がっています。そうした「発展」の一方、車が増えたためか五体投地をしながら峠を越える人の姿は、いつのまにか見かけなくなりました。

伝統服のキラヤゴを作るためのマタ、ヤタなどの布地は、自家製の織機などで織られています。中部プムタンに向かうチュメイでは、布地専門の二軒の店が並んでいますので、織機とともに色とりどりの種類のものを見ることができます。

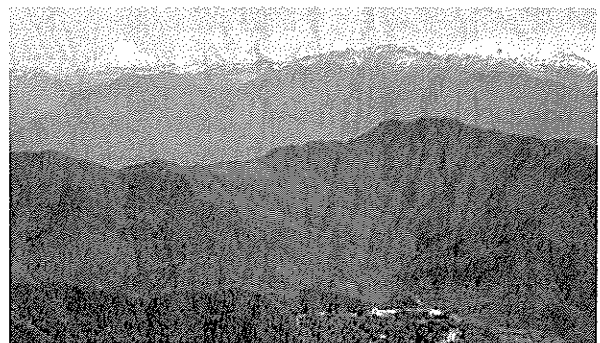
日用品や仏具は、周辺国のインド、タイ、ネパールに頼り、電気製品は、インド、韓国や中国製が多い印象です。自国内の地図さえも、タイやインド、ネパールで作られています。またインド国境南部に30程度の工場群があるパサカでは、カーバイド、鉄などが生産されています。その他、ウイスキー、ミネラルウォーターやビール、カモミールティーなどが作られています。輸入品の大半、食糧、野菜や果物は、南部のインド国境の町プンツォリンから各地の市場に運ばれてきます。しかし電気製品が全て揃う家庭は限られていて、昔の日本のように川で洗濯をする風景は、普通にみられます。インターネットが解禁されて16年余り、若者の首都への流入、若年者失業率の高さ、首都における深夜犯罪率の上昇、道端に自生している大麻に手を染める若者など問題は多少ありますが、他の多くの途上国に比べれば、治安はよく安全な国です。

最後は、プロジェクトの仕事のことを少し書き

ます。赴任した2011年は、国内の各地から集まって来る電気指導員のために、8テーマほど選びそれぞれの研修を1週間から10日ほどの日程で企画して、実施するという日々を過ごしました。2012年は、指導員の何人かをマスタートレーナに指名して1:1で指導して養成し、自ら企画実施できるようにしました。そして、制御教材の開発、指導員による教材コンテストなども行ないましたが、いずれの場合も思ったような部品や機材調達はできず、また日本では想像できないほどの時間がかかりスケジュール調整に苦労しました。首都にリーダーが一人、現場スタッフは私だけという小規模プロジェクトでしたが、参加する指導員たちの技術と技能は、離任するまでの2年間に、実習課題を時間制限付きで評価した結果、自己評価と客観的評価シートに示されたように確かに向上したと確信しています。残念ながら、このプロジェクトのフェーズ2は、計画されていません。2013年6月に終了してから、早くも3年が過ぎ、指導員たちの技術・技能レベルが下がってなければいいかと心配になります。

彼らが各地から研修に来るたびにブータン式の辛い料理を用意し、アパートでビールを前に思うまま語り合った日が夢のように感じられるこの頃です。中部のチュメイ校や東ブータンのランジュン校への出張時でも指導員たちと一緒に食事し、この国の宗教行事や実際の生活のことなど色々とお教わりしました。その他、短専時に滞在、赴任後にアパートが完成するまで2ヶ月ほど滞在した近くのダムチェン・リゾートの従業員たちともいつの間にか親しくなりました。離任の夜、そこで食事した時、彼らは、王様と王妃の写真を飾った額をプレゼントしてくれて、本当に驚きました。

こうしたブータンの人々との交流を通じて思う



プナカへの峠道から北ヒマラヤ連峰を臨む(12月)

のですが、いい意味で「足るを知る」生活スタイル、仏教に対する敬虔な姿勢など今の日本人にとって、経済的発展が全てではない、人とのつながりこそが大切だと教えてくれている気がします。この国は、確かにインドや日欧などの援助がないと経済的には、成り立たないのですが、援助欲しさに援助国に阿るところはありません。むしろ逆に、卑屈になることなく、我々の方針と合致するなら一緒にやりましょうという感じです。欧米で教育されている役人の多くは、学位を持っていて、主張は堂々としています。しかし親しくなると、国是としてGNHを標榜している国だけに、本当に面倒見がよくJICA関係者やADB、NGO関係の日本人は、おそらく誰もが彼らの優しさに救われていると思います。国際政治の場では、日本が不利な立場に置かれても擁護し、国連関係機関の長に日本人が立候補すれば、例外なく支持してくれ

ます。たぶん世界中で一番日本の立場にたって助けてくれる大の親日国、それがブータンです。

現国王には、昨年2016年2月5日ペマ王妃との間に、待望の跡継ぎナムゲル王子が誕生しました。王様のFacebookで時々かわいらしい写真が公開されています。

2011年から2012年の途中までに撮影した写真を掲載してくれている元同僚運営の「ワシモ」、JICA派遣前研修中1対1で一日つきあっていただいた本業がピアノ教師のYさん運営の「ブータン館」のホームページを以下に記します。ブータンを知る一助になれば幸いです。では、ゾンカで「幸あれかし」の意味の別れの挨拶で、タシ・デレ!

ワシモ <http://washimo-web.jp/Bhutan/BhutanIndex.htm>

ブータン館 <http://bhutan.fan-site.net/>

## 特集

# 大洋州における健康問題を保健医療分野の人材育成で支援する

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 国際離島医療学分野

嶽崎 俊郎

Toshiro TAKEZAKI

鹿児島大学では、鹿児島県の離島を活用して、2002年からJICA草の根研修コース、2008年からJICA集団研修を行ってきました。今回は、このコースを行ってきた理由と内容について、紹介したいと思います。



大洋州（オセアニア）は、太平洋の西側から南部に広がる地域です。オーストラリアとニュージーランド、パプア・ニューギニアの他は、人口規模の小さい島嶼国です。オーストラリアとニュージーランド以外の殆どの国は、低所得国に属し、低所得国に共通する小児の下痢や肺炎、感染症、母子保健の健康問題が、大きなウエートを占めています。

これら健康課題が未解決のまま、さらに大きな健康課題が重くのしかかっています。それは、肥満です。右図は、日本で肥満とされているBMIが25以上の人、世界の国ごとの割合です。世界の上位10位のうち、大洋州の国が8か国も占めています。132位である日本と比べると、いかに多いかが解ります。

**過体重(BMI≥25)の割合**  
(世界191国 18歳以上男性 年齢調整 2014年)

順位	国	%
1	クック諸島	81.0
2	ナウル	80.2
3	パプア・ニューギニア	79.6
4	ニウエ	78.6
5	マーシャル諸島	74.4
6	トンガ	74.4
7	サモア	73.4
8	米国	72.8
9	クウェート	72.7
10	ツバル	72.7
...		
132	日本	28.8

資料: Global Health Observatory Data Repository (WHO) URL  
http://apps.who.int/gho/data/node/main.A096?lang=en

肥満は、様々な生活習慣病の原因になりますが、中でも著明なのが糖尿病です。下図は、世界の国ごとの糖尿病死亡率です。世界の上位10位のうち、大洋州の国から2か国が含まれています。糖尿病の知識も健診の仕組みもない地域での糖尿病患者は、重症になって重い症状が出てから医療機関を受診し、死亡率が非常に高くなります。肥満率をみても、今後、大洋州の国々で糖尿病が益々増えていくことが懸念されます。

肥満と糖尿病が著明に増えてきた背景には、グローバル化に伴う生活習慣の急激な変化があります。カロリー、脂肪、糖質の過剰摂取に加え、も

**糖尿病の死亡率**

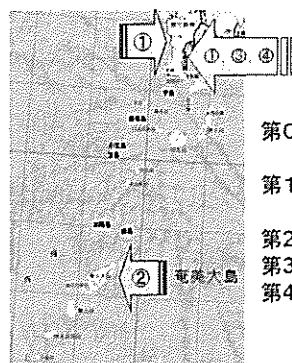
(世界172国 男性 年齢調整 2012年)

順位	国	%
1	モーリシャス	201.9
2	フィジー	170.1
3	トリニダードトバゴ	155.0
4	ギアナ	129.5
5	モロッコ	106.2
6	パプア・ニューギニア	105.3
7	南アフリカ	98.5
8	バーレーン	96.9
9	メキシコ	95.8
10	ソロモン諸島	93.3
...		
132	日本	5.4

資料: Global Health Observatory Data Repository (WHO) URL  
http://apps.who.int/gho/data/node/main.A865DIABETES?lang=en



運動教室 (奄美大島の瀬戸内町)



第0週: JICA北九州研修センター  
(日本文化・日本語研修)

第1週: ①大学で講義

薩摩川内市で講義実習

第2週: ②奄美大島で保健活動実習

第3週: ③大学で問題解決型演習

第4週: ④大学でaction plan作成

とも運動習慣がないところに、交通の発達とともに運動量が低下しています。

大洋州の医療インフラは脆弱で、医療での対応には限界があります。住民の肥満予防と健康増進活動の取組みが効果です。しかし、それを支える保健医療スタッフの質も量も不足しています。この保健医療スタッフを育成する目的で、鹿児島県の離島を活用した人材育成プログラムを作成し、JICAコースを始めました。

特に奄美大島での市町村やボランティアの協力を得て行った保健活動の体験は好評でした。自国と似た空気の中で、住民と触れあいながら、一緒に汗をかきながら、自国での活動展開を考えてもらえたと思います。

コース終了後には、研修員の活動を少しでも後押しするために、フォローアップとして研修員の母国を数年おきに順番に訪問し、ワークショップも開催しました。

現在は他の機関がコースを継続していますが、保健活動の中核となる人材を育成し、さらに自国での人材育成に広がっていくことを願って、奄美大島での1週間分は、コースの企画や調整、講義を続けています。



ワークショップ (フィジー)

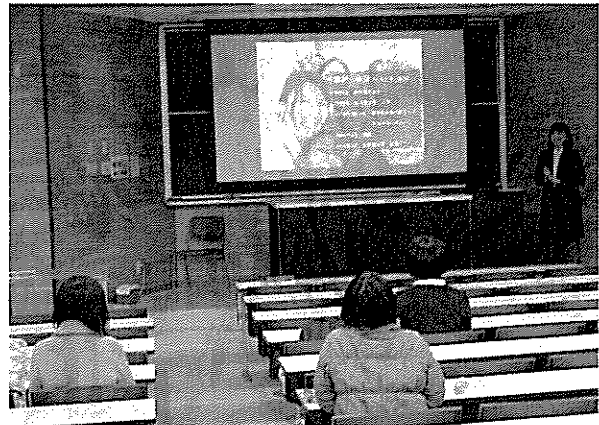
# 平成28年度ボランティアセミナー

平成28年度青年海外協力隊 体験談 & 写真展 in 鹿児島大学  
 (鹿児島県JICA派遣専門家連絡会・JICAデスク鹿児島 共催)

平成28年12月7日(水)、鹿児島大学郡元キャンパス共通教育棟111講義室において、JICAボランティアセミナーを実施しました。学生ならびに関係者をあわせて9名が参加され、ボランティア概要の説明および青年海外協力隊としての活動発表を行いました。鹿児島大学在学中に、中米のエルサルバドルにて環境教育の指導を行った宗村奈津氏が、休学してまで青年海外協力隊へ参加した理由や魅力などをご自身の将来に関連付けながら話をしました。その他、「状況に合わせて臨機応変に対応すること」や「実際にチャレンジすることの大切さ」などを学生へメッセージも送りました。セミナーの参加者が少人数であったことから、会場からの質問にもじっくりと向き合うことも出来ました。

また、セミナーの前後約1週間、郡元キャンパスの学習交流プラザ2階と桜ヶ丘キャンパス桜ヶ丘会館(生協)にて国際協力写真展も実施し、世界の現状や国際協力の必要性など紹介に努めました。

2016年12月現在、鹿児島県から41名がJICAボランティアに参加していますが、国際協力の在り方や社会還元の方法など、再認識する場となることを期待します。  
 (JICAデスク鹿児島 国際協力推進員 福永みゆき)



【体験談】宗村 奈津 さん(エルサルバドル/環境教育)

法学部経済情報学科在学中、中米のエルサルバドルにて青年海外協力隊として活動しました。私に与えられた仕事は、市役所と同様、学校やコミュニティでの環境に関する啓発活動やコンポストセンターでの指導。「休学してまで協力隊に参加した理由や魅力」についてもお話できればと思います。

～参加者対象～ 事前申込不要・参加無料・入場自由

【日時】12月7日(水) 18:00～19:30  
 ～セミナープログラム～  
 18:00～18:30 ご挨拶・ボランティア趣意説明  
 18:30～19:10 青年海外協力隊体験談  
 19:10～19:20 応募方法/質疑応答/アンケート  
 19:30 終了

【写真展】●郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習ラウンジ2 12月 5日(月)～13日(水)  
 ●桜ヶ丘キャンパス 桜ヶ丘会館(生協) 12月 15日(月)～22日(水)

〒900-0005 鹿児島県鹿児島市中央2-1-1 JICAデスク鹿児島  
 E-mail: hokodok-desk-kagoshima@ca.go.jp Tel: 099-221-6624 FAX: 099-221-6643  
 印刷物について、おのれの環境を大切に、全てを資源として活用させていただきます。

# 第4回市民公開講座

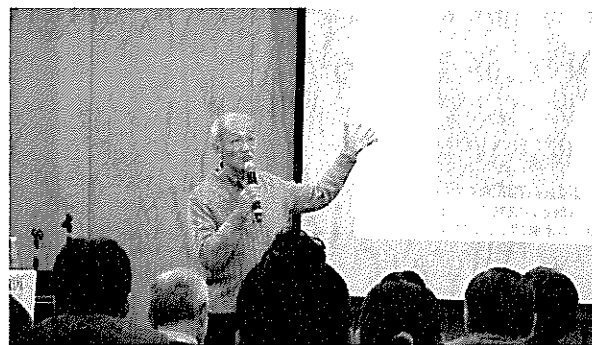
## シーカヤックから見るフィリピン黒潮源流域の人々

山岡 耕作  
Kosaku YAMAOKA

日本は黒潮の恵みと密接に結びついた海の国であり、黒潮の存在なくして我国の自然も文化も考えられない。それにもかかわらず、日本人の黒潮に対する認識は決して高いとは言えない。今後日本の持続可能社会を考える際には、我々の足下に固有にある黒潮等の資源を十分に利用し生きていく術を考えることがより重要になる。

高知大学は平成16年度より大学院博士課程独立研究科「黒潮圏海洋科学研究科」を設置した。黒潮の直接的影響を受ける陸地を含めた場所での、文理融合による新たな持続可能社会を指向した新学問分野「黒潮圏科学」の創成を目指すものだ。このような学問分野こそ、地球上の各地域で身近にある資源を十分に利用しながら、環境にできるだけ負荷をかけずに幸せに生活する21世紀、22世紀の人類の生き方の指針となるはずである。

演者の元々の専門は潜水観察を基本とした魚類生態学であった。農学部から黒潮圏海洋科学研究科への異動に伴い、研究対象に「人間」を含める



必要性が生じた。

黒潮下流域に当たる我国周辺については、黒潮研究はかなり進んでいるが、源流域に当たるフィリピンルソン島東岸域についてはほとんど情報がない。ルソン島東北沿岸のように、訪問するための道路がなく、アクセスができない場所が多いからだ。

海洋冒険家八幡暁氏との出会いにより、彼のサポートを得ながら人力のシーカヤックを用いて、2010年から3回に分けて、ルソン島東岸約1000キロの海に生きる人々の生き様を観てみる事となった。第一次調査は2010年5月13日アルバイ県タバコ発、6月2日北カマリネス県メルセデス着。第二次調査は2011年5月11日北カマリネス県ビンソンズ発、5月23日ケソン県インファンタ着。第三次調査は2013年3月9日オーロラ県バレール発、3月23日カガヤン県サンターナ着。この間27漁村を訪問し245名の漁業者に対して聴き取り調査を実施した。聴き取り調査の主な項目は以下の通りだ。漁業の目的、漁場の場所、後継者の有無、主な収入源、月収、生活で最重要なこと、現状で幸せか、黒潮を知っているか。

調査実施前、「黒潮源流域」という単語の響きから、魚影の極めて濃い環境が予想されたが、現場の状況は正反対であり、地先サンゴ礁の魚はほぼ取りつくされていった。それに伴い、違法なフーカー潜水やダイナマイト漁法も行われ、現地零細漁業は負のスパイラルに陥っていた。

サンゴ礁のラグーン（礁湖）内のナマコは採り

### 市民公開講演会

**シーカヤックから見る  
フィリピン黒潮源流域の人々**

【日 時】2017年1月21日(土) 15:30~17:00(15:00 受付開始)  
 【会 場】 民大館2階ホール(高知大学東キャンパス1号館3号) VISION BUILD  
 【問い合わせ】 高知大学農学部黒潮圏海洋科学 山岡 耕作  
 <電話> 099-278-4855 <メール> jicag@ms.kufm.kagoshima-u.ac.jp >  
 【主 催】 高知大学JICA 後援 農学部黒潮圏海洋科学

**講演内容**  
 日本は黒潮の恵みと密接に結びついた海の国であり、黒潮の存在なくして我国の自然も文化も考えられない。それにもかかわらず、日本人の黒潮に対する認識は決して高いとは言えない。今後日本の持続可能社会を考える際には、我々の足下に固有にある黒潮等の資源を十分に利用し生きていく術を考えることがより重要になる。

**講師プロフィール**  
 山岡 耕作氏  
 1967年生まれ。高知大学農学部黒潮圏海洋科学専攻、高知大学農学部、専門は魚類生態学、アフリカ・南アメリカのサンゴ礁生態系研究。2010年よりフィリピンルソン島東岸域の漁村を訪問し、2013年まで3回調査を実施。黒潮源流域の人々の生活様式を調査し、黒潮の恵みと密接に結びついた人々の生活様式を調査する。

ぜひ会場へお越しください！  
 後援(多) JICA 高知大学農学部黒潮圏海洋科学 高知大学農学部





つくされ全く見られず、中華料理に用いられる乾燥ナマコとしてキロ当たり約3千ペソで売買されていた。また、ルソン島東北端近辺の河口域ではシラスウナギ（主にオオウナギ）が採捕され、キロ当たり約4万ペソで中国人及び台湾人バイヤーに売られていた。

黒潮の存在については、第一次及び第二次調査では全く認識されていなかった。しかしルソン島東北部での第三次調査では多くの漁師が黒潮の存在を「アゴス」とか「シリッグ」という単語として認識し、それに乗ると北に流され帰れなくなるという恐怖の対象となっていた。

月収は千ペソから2千ペソの漁師が多く、経済的には大変厳しい生活状況であった。しかし、約9割の漁師が「現状で幸せ」だと即答し、生活で最も大切なものは「家族」と答えた。

経済的には全く恵まれないにもかかわらず、9割の漁師が幸せだと即答した事実をどう理解すればよいのであろうか。多様な解釈が可能だが、その一つとして漁師という自然の中での生業が関係しているのではないかと。人智を超えた存在である自然の前で人間の傲慢さに歯止めがかけられる。

人間が幸せに生きていくために自然が持つ意味を、全面的に見直す必要があるように思われる。



## インドネシア留学報告

### —サムラトランギ大学における臨床医学実習と地域医療調査—



私は2015年10月から2016年8月までの11か月間、インドネシアのマナドにあるサムラトランギ大学に留学させていただきました。海外の地域医療の状況を知り、違った視点で日本や世界の様々な医療問題と向き合えるようになればと思い、留学を決意しました。

臨床医学実習では、現地の学生たちに混ざりサ

鹿兒島大学医学部医学科5年  
田井村 依里  
Eri TAIMURA

ムラトランギ大学の大学病院で実習させていただきました。サムラトランギ大学の医学教育は、学生も医療スタッフとして扱われており、学生たちも朝6時に病院へ行き、医師の助手として働きながら学び、週に1~2度の夜勤もこなしていました。当初はインドネシア語もできず、見学しているだけの効率の悪い実習に焦ってしまったり、日本人が一人というマイノリティ体験にホームシックになったりすることもありましたが、インドネシア人は本当に人懐っこくて人と人の距離が近く、周囲の人がいつでも助けてくれ、すぐに沢山の友人ができ、彼らと一緒に過ごすことで辛い時も乗り越えることが出来ました。

段々とインドネシア語が出来るようになり、み



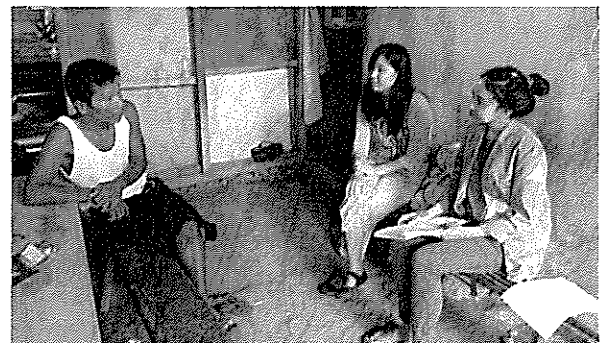
んなと同じように患者さんや家族と会話できるようになったり、レポートを発表させてもらったりするようになると、実習も充実したものになり、様々なことを見ることが出来ました。北スラウェシ地方で一番大きい病院で実習していましたが、雨漏りしていたり、ネズミが走っていたりするのは当たり前で、においもひどく大部屋はクーラーもない、固いベッドが並べられている環境で行われているプライマリケアは、家族や地域住民、宗教など、患者の周りの力が医療にとって重要な部分を占めていました。資源が足りない分を、地域の保健センターが中心となって疾病予防や健康教育に努めることで「家族力」や「地域力」を引き出すことで補っており、非常に感銘を受けました。特に印象的だったのは「宗教の力」で、患者さんの周りに家族や地域の人など30人ほどが集まりお祈りが始まったときで、宗教は患者だけでなく家族や病院のスタッフの心にも響く力を持っているのだと感じ、彼らの価値観に触れることが出来た気がして現地ではしかできない体験ができました。

公衆衛生実習では、内陸部と島嶼部の一般住民を対象に高血圧と関連要因の疫学調査を行いました。血圧測定は自分で行き、質問票を用いたインタビュー調査は、内陸部では現地大学生、島嶼部では地域の方々の助けを借りながら行いました。40歳以上で高血圧ありの割合は、内陸部で

47%、島嶼部で50%と差はありませんでした。一方、40歳未満でも、それぞれ22%と15%に高血圧が認められ、若年者での高血圧ありの割合が日本に比べ高いことが解りました。計画を自分で立て、ほとんど一人で行うのはとても大変で、疫学調査の難しさを思い知りましたが、地域住民の方々と触れ合うのが本当に楽しくて、疫学や予防医学の分野にも興味がわきました。マナドの方々には本当に親切で、拙いインドネシア語でホームステイをしながら調査をしたいという私の希望を叶えてくれ、ホームステイ先でも一緒に魚を釣ったりマンゴーをとって食べたりお祭りに参加したりと、様々な体験をすることが出来ました。

調査を行った地域は生活環境が想像以上に劣悪でした。写真の井戸は左が飲み水で右がシャワー用。後ろにはごみが広がっていました。離島に行った際は水道水には海水の塩分が混じっていてしょっぱく、きれいな海にはごみが広がっていました。マラリアやデング熱が蔓延している地域もあり、環境の整備は一刻も早く行われなければならない、それにはインドネシアだけでなく、世界全体で取り組まなければならないと肌で感じました。

今回のマナドでの実習を通して、地域に入りこむためには、同じ言葉を話し、同じものを食べ、同じように生活し、何にでも挑戦することの大切さや、行かなければ分からない、良い点や改善点、その土地にあった解決策があるのだということを学びました。そしてそれらはインドネシア・日本で違っており、良いところを見つけよう、と努力することで見えてきたことも沢山ありました。貴重な体験をさせていただき、支えてくださった方々に本当に感謝しています。今回の経験をいつか生かせるように努力してまいります。



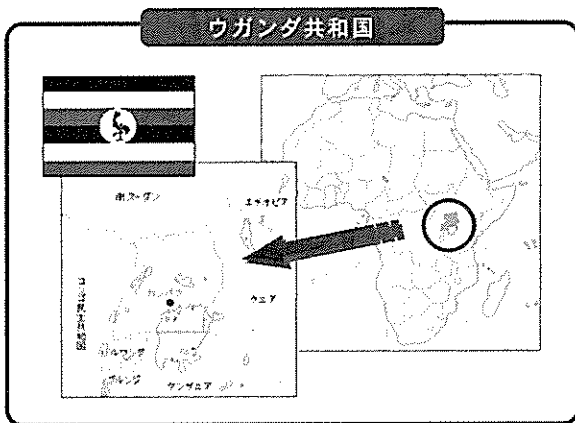


# アフリカでのJICAボランティアの活動報告

東京大学大学院 新領域創成科学研究科

保坂 祐紀

Yuki HOSAKA



引用：外務省 [ODA] 広報・資料

ウガンダは、アフリカ中央部、赤道直下に位置しており、標高が高く国土の5分の1を湖や川が占めており、過ごしやすい気候に恵まれています。3～5月と10～12月には雨期があり緑豊かで、アフリカの真珠とも言われます。

ウガンダをはじめアフリカ諸国では生活形態の変化に伴いコメの消費量が増加していますが、その自給率は低く、輸入に依存しています。そんなアフリカの食料問題解決に役立つと期待されているのがNERICAです。NERICAとはNew Rice for Africaの頭文字をとったもので、病気・乾燥に強いアフリカ稲 (*Oryza glaberrima*) と高収量のアジア稲 (*Oryza sativa*) を交雑した新品種です。NERICAのなかでもとりわけ陸稲品種は水田をつくらずに栽培可能であるため、農家にとっても取り入れやすく、またコメは他の主食である豆や調理用バナナよりも高く売れるため、換金作物としても注目されています。

私は、2016年の9月からJICAの短期ボランティア制度を利用して、ここウガンダの国立作物資源研究所で直播栽培でのイネの出芽苗立ち向上技術の開発に係る研究をしています。本研究は、

鹿児島大学の熱帯作物学研究室の坂上教授が行う共同研究プロジェクト「アフリカ版緑の革命に資する技術開発」の一課題を担っています。常夏気候のウガンダでは稲の二期作が可能であり、私の半年の任期でも播種から収穫まで出来る予定でした。しかし雨期に雨が降らず水不足になり、稲の生育が遅れ帰国までに収穫が出来なくなっていました。日本で暮らしていると水不足を感じることはなく、さらに電気にも食料にも困ることはなかなかありませんが、ウガンダではそのどれかがいつ供給されなくなるか分からないものであることを実感しました。

今派遣では半年という短い期間ですが、短期ボランティアとしてウガンダで生活し、アフリカの稲栽培について学ぶことができとても勉強になりました。また日本以外の国で暮らすことにより見えた日本の良い面、悪い面もあり、これまでよりも広い視野を持てるようになったと思います。ウガンダに来る前は治安や病気など不安も多ありましたが、来てからは安全に過ごすことができ、穏やかで親切な人が多く、今はとても過ごしやすい国だと感じています。まだまだ発展する可能性を秘めた国であり、これからウガンダとNERICAの研究がさらに発展していくことがとても楽しみです。



# 平成28年度「連絡会」活動報告

## 1. JICAボランティア・セミナー

JICA九州の活動を支援するために、JICAデスク鹿児島と共同で、平成28年12月7日に鹿児島大学郡元キャンパスの教室で青年海外協力隊募集説明会を開催しました。今回は、鹿児島大学法文学部学生時代に休学して青年海外協力隊に応募し、エルサルバドルで活動した宗村奈津さんに講演して頂きました。エルサルバドルで市役所に所属し、学校やコミュニティでの環境に関する啓発活動やコンポストセンターでの指導をして、現地の人達と暖かい交流ができた話や、休学してまで協力隊に参加した理由や魅力についてもお話して頂きました。参加者は5名と多くありませんでしたが、講演後も熱心な質問が続き、実際に大きな興味を持って頂いたようでした。

## 2. 国際協力パネル展～鹿児島と世界をつなぐ人々の開催

青年海外協力隊の催しに合わせ、平成29年3月11日に県民交流センター前の福祉プラザ5階で、合同パネル展を開催します。市民が対象で、鹿児島県在住の専門家、青年海外協力隊OB、OG、シニア海外ボランティアOB、OGの活動内容をパネルにして展示する予定です。

## 3. 国際協力パネル展

新たな取り組みとして、平成28年12月5日～13日に鹿児島大学の郡元キャンパスで、同15日～22日に桜ヶ丘キャンパスで国際協力パネル展を実施しました。

## 4. 大学での国際協力教育

鹿児島大学共通教育の後期授業科目「国際協力論」では、全15コマの授業のうち、同会員が5コマを担当し、国際協力への理解を教育しています。受講生は、ほぼ全学部の1～2年生265名です。

## 5. 会報誌「NEWSLETTER」第16号の発行

毎年、発酵している本会報「NEWSLETTER」も今年度で第16号となりました。第15号から、より市民向けの内容にして、会員の他、関係機関に配布しています。

## 6. 総会

総会を開催し、平成28年度の活動や決算の報告と審議を行い、平成29年度の活動計画と予算案を検討しました。来年度は、より幅広く広報するために、ホームページの開設や学生サークルへの働きかけなどを行い、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアのOB、OG団体の活動への協力や参加を通じて、連携を深めていくことが提案され、承認されました。

## 7. 市民公開講演会

第4回目となる市民公開講演会が行われました。講師は、本会の新幹事である山岡耕作氏（高知大学名誉教授）で、演題は「シーカヤックからみるフィリピン黒潮源流域の人々」、参加人数は41名、中学生1名と小学5年生1名も参加しました。中学生からの熱心な質問も含め、活発な質疑応答が続き、活気のある有意義な講演会となりました。

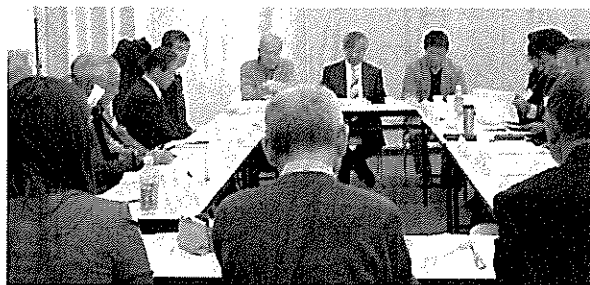
(活動担当幹事：越塩 俊介、嶽崎俊郎)

## 平成28年度「連絡会」定期総会報告

平成29年1月21日(土)に天文館ビジョンホール8階にて開催された。嶽崎会長の挨拶に続き、JICA九州センターの植村史香次長、青年海外協力隊鹿児島県OB会の桑山昌洋顧問からご挨拶を頂いた。続いて、1)平成28年度活動報告、2)会計報告、3)平成29年度活動計画案が審議され、議決された。平成29年度活動計画案として、出前授業情報も掲載した本連絡会のホームページ作成と、「市民公開講演会」の内容としては農林系とすることが提案された。4)その他として、青年海外協力隊鹿児島県OB会との関係強化の必要性が提言され、まずは一緒に連携協力できる機会を増やしていくこととなった。また、意見交換では、大学生など若者の国際協力に対する関心を高めるため、ボランティアセミナーやパネル展の実施を大学祭など行事に合わせることも考えては、との意見が出され、今後学生団体との接触を図ることとなった。

総会に続いて、第4回目となる市民公開講演会が行われた。講師は、本会の新幹事である山岡耕作氏(高知大学名誉教授)で、演題は「シーカヤックからみるフィリピン黒潮源流域の人々」、参加人数は41名で、中学生1名と小学5年生1名も参加し、中学生からの熱心な質問も含め、活発な質疑応答が続き、活気のある有意義な講演会となった。

(総会担当幹事：山岡耕作)



# 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結集する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

## 編集後記

前号に続き、リニューアルのニューズレター No.16お届けします。昨年は熊本で大地震がありました。その後、国内外から復興に向けた様々な支援があったようです。改めて、国際協力の重要性を認識しました。本号では、JICAが実施する人材支援を特集し、また、会員の活動報告もしました。さらに、学生らの海外報告も充実しています。本ニューズレターは、会員のみならず、一般の方々にもぜひ触れていただきたいと願っています。皆さまからの、ご意見をお待ち申し上げます。

編集人：坂上 潤一

## 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第16号

発行 2017年3月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 嶽崎 俊郎

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

鹿児島大学歯学総合研究科国際離島医療学内

電話：099-275-6853 FAX：099-275-6854

E-mail：takezaki@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp

担当：嶽崎俊郎（たけざきとしろう）